

【 復活のトロパリ 第3調 】

てんにあるものたのしめよ、ちにあるもの
 天在者 樂 地在者

よろこべよ、しゅはそのひぢのちからをあら
 悦 主 其 臂 力 顯

わして、しをもってしをほろぼし、ふ復
 死 以 死 滅

くかつのはじめとなり、われらをぢごく
 活 首 我 等 地 獄

のはらよりすくい、せかいにおおいな
 腹 救 世 界 大

るあわれみをたまいたればなり。
 憐 賜

【 三歌經のコンダク 第3調 】

こうえいはちちとこいとせいしんに
 光 榮 父 子 と 聖 神

きす。
 歸

しゅよ、もろもろのつみおよびむちのしわざ
 主 諸 罪 及 無 知 行 爲

ていたくよわりたるわがたましいを、む昔
 大 弱 我 靈

かしなんしゃをおこししごとく、なんぢのかみ
 難 者 起 如 爾 神

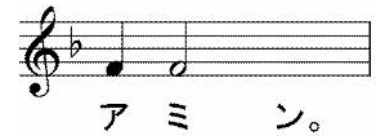
た る め い を も っ て お こ し た ま え 、 わ が す く
 命 以 起 給 我 救
 わ れ て な ん ち に よ ば ん た め な り 、 じ ん じ
 爾 呼 爲 仁 慈
 な る ハ リ ス ト ス よ 、 こ う え い は な ん ち に
 光 榮 な 爾
 き 歸 す 。

【 パスハのコンダク 第8調 】

い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
 今 何 時 世 世
 し せ ぎ る ハ リ ス ト ス か み よ 、 な ん ち は は か に く
 死 神 爾 墓 降
 だ れ ど も ち ご く の ち か ら を や ぶ り 、 か 勝
 地 獄 力 破 勝
 つ も の と し て ふ く か つ せ り 、 け い こ う
 者 復 活 携 香
 ぢ ょ に よ ろ こ べ よ と い い 、 な ん ち の し と に へ 平
 女 慶 爾 使 徒 平
 い あ ん を あ た え 、 ほ ろ び し も の に ふ く
 安 與 亡 者 復
 か つ を た ま え り 。
 活 賜

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 ねがものちえめいごあたつみおこなものすそのすくいためつうかい
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 たわれらいやふとうなんぢしよぼくこときおいなんぢせい
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 さいだんこうえいまえたなんぢとうぜんふくはいさんえいたてまつたもの
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
 しゅさいなんぢみづかわれらざいにんくちせいさんうたうなんぢじんじ
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 もつわれらのぞわれらおよじゆうじゆうつみゆるわたましいからだ
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 せいわれらしょうがいぜんこうもつなんぢつとえたませいしょう
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生
 しんぢよこせいなんぢよろこびなしよせいじんきとうよ
 神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
 聖神、聖勇毅、聖

じょうせいのもものよ、われらをあわれめ
 常生者、我等を憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖神、聖勇毅、聖

なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
 常生者、我等を憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 殺
 聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
 光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ 世 世 に 、 ア ミ ン 。
 歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇

き 殺 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 聖 常 生 者 我 等

あ わ れ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 プロキメン 提綱 癱者の主日 第1調 】

司祭) つつし き しゅうじん へいあん
 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) なんぢ しん
 爾の神にも、

司祭) えいち
 睿智、

誦經) プロキメン、しゅう われらなんぢ たの ごと なんぢ あわれみ われら た たま
 主よ、我等爾を頼むが如く、爾の憐を我等に垂れ給え、

しゅ よ 、 わ れ ら な ん ぢ を た の む が ご と く 、
 主 我 等 爾 頼 如
 な ん ぢ の あ わ れ み を わ れ ら に た れ た ま
 爾 憐 我 等 垂 給
 え 。

誦經) ^{ぎじん} 義人よ、^{しゅ} 主の爲に ^{よろこ} 喜べ、^{さんえい} 讚榮するは ^{ぎしゃ} 義者に ^{かな} 適う、

しゅ よ 、 わ れ ら な ん ぢ を た の む が ご と く 、
 主 我 等 爾 頼 如
 な ん ぢ の あ わ れ み を わ れ ら に た れ た ま
 爾 憐 我 等 垂 給
 え 。

誦經) ^{しゅ} 主よ、^{われらなんぢ} 我等爾 ^{たの} を頼むが ^{ごと} 如く、

な ん ぢ の あ わ れ み を わ れ ら に た れ た ま
 爾 憐 我 等 垂 給
 え 。

【 ^{アポストロス} 使徒經 23 端 聖使徒行實 9 章 32 節～43 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしとこうじつ} 聖使徒行實の讀、

司祭) ^{つつし} 謹みて ^き 聽くべし、

誦經) ^か 彼の日、^ひ ペトル ^{あまね} 徧く ^{しょほう} 諸方を ^ゆ 往きて、^お リッダに ^{せいと} 居る ^{いた} 聖徒にも ^{かしこ} 詣りし ^{おい} ことあり。 ^{かれ} 彼處に ^{かれ} 於て彼

いちにん な ちゅうぶう うれ はちねんかんとこ ふ もの あ かれ い
 は一人、名はエネイ、癱瘋を患いて八年間床に臥せる者に遇えり。ペトル彼に謂えり、
 エネイよ、イイスス ハリストス 爾を愈す、起きて、爾の床を治めよ、彼直に起きたり。
 リツダ及びサロンに居る者は、皆彼を見て、主に歸せり。イオツピヤに一の女徒、名はタ
 ヴィファ、譯すれば鹿と云う者あり、彼は廣く善事を行い、施濟を爲せり。適其日
 に病みて死せり。彼を洗いて、樓に置きたり。リツダはイオツピヤに近くに因り、門徒は
 ペトル彼處に在りと聞きて、二人を彼に遣して、其遅わらずして彼等に來らんことを求
 めたり。ペトル起ちて、之と偕に往けり、至るに及びて、彼を引きて、樓に登らせ、癡婦
 皆哭きて、彼の側に立ち、鹿の彼等と偕に在りしに作りたる上衣下衣を示せり。ペト
 ル彼等を悉く外に出し、膝を屈めて禱れり、而して屍に向いて曰えり、タヴィフ
 ア起きよ。彼其目を啓き、ペトルを見て坐せり。ペトル之に手を授けて、之を起し、聖徒及
 び癡婦を召して、之を活ける者として其前に立てたり。此の事全イオツピヤの知る所とな
 りて、多くの者主を信ぜり。

(比較用 口語訳) ペテロは方々をめぐり歩いたが、ルダに住む聖徒たちのところへも下って行った。そして、そこで、八年間も床についているアイネヤという人に会った。この人は中風であった。ペテロが彼に言った、「アイネヤよ、イエス・キリストがあなたをいやして下さるのだ。起きなさい。そして床を取りあげなさい」。すると、彼はただちに起きあがった。ルダとサロンに住む人たちは、みなそれを見て、主に帰依した。ヨツパにタビタ（これを訳すと、ドルカス、すなわち、かもしか）という女弟子がいた。数々のよい働きや施しをしていた婦人であった。ところが、そのころ病気になるまで、人々はそのからだを洗って、屋上の間に安置した。ルダはヨツパに近かったので、弟子たちはペテロがルダにきていると聞き、ふたりの者を彼のもとにやっ、て、「どうぞ、早くこちらにおいで下さい」と頼んだ。そこでペテロは立って、ふたりの者に連れられてきた。彼が着くとすぐ、屋上の間に案内された。すると、やもめたちがみんな彼のそばに寄ってきて、ドルカスが生前つくった下着や上着の数々を、泣きながら見せるのであった。ペテロはみんなの者を外に出し、ひざまずいて祈った。それから死体の方に向いて、「タビタよ、起きなさい」と言った。すると彼女は目をあげ、ペテロを見て起きなおった。ペテロは彼女に手をかして立たせた。それから、聖徒たちや、やもめたちを呼び入れて、彼女が生きかえているのを見せた。このことがヨツパ中に知れわたり、多くの人々が主を信じた。

【 アリルイヤ 主日第5調 】

司祭) なんぢ へいあん
 爾に平安、

誦經) なんぢ しん
 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) ^{しゅ われなが なんぢ じれん うた わ くち もつ よよ なんぢ しんじつ つた} 主よ、我永く爾の慈憐を歌い、我が口を以て世に爾の眞實を傳えん、



誦經) ^{けだしわれい じれん なが た なんぢ なんぢ しんじつ てん かた} 蓋我言う、慈慈は永く建てられたり、爾は爾の眞實を天に固めたり、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ し} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思

^{ねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} 念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ} を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ

^{ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} 所を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいし} よ、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至

^{ぜん いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} 善にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 イオアン福音書 14 端 5 章 1~15 節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) イオアン傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時、イイスス イエルサリムに上れり。イエルサリムに羊の門の側かたわら いけに池あり、エウレイの言ことばにヴィフェズダと曰う。之に傍いいて五これの廊そあり、此いつつの中にろう多くの病者こうち、警者おお、跛者びょうしゃ、血枯めしいる者あしなえ臥して、水ちかの動ものふくを待みづてり。蓋うご主まの使けだしゅ時つかいときありて池いけに下くだりて、水みづを動うごかせり、水みづの動うごく後のちま先いけづ池いに入る者ものは、何なにの病やまいを患うれうるに論ろんなく、愈いゆるを得えたり。彼處かしこに一人ひとり三さん十じゅう八はち年ねん病やまいを患うれうる者ものありき。イイスス彼かれが臥ふせるを見み、其その之これを患うれうることす已ひさに久ししきを知かれりて、彼いに謂なんぢう爾ほつ愈びょうえんことを欲をするか。病者しゃ答こたえて曰いえり、主しゅよ、然しかり、但ただ水みづの動うごく時とき、我われを扶たすけて、池いけに下くだす人ひとなし、我わが來きたる時ときは、他人たにん我われに先さきだちて下くだる。イイスス彼かれに謂いう、起おきて、爾なんぢの牀とこを取りとりて行いけ。其その人ひと直ただに愈いえ、其その牀とこを取りとりて行いけり、是この日は安ひ息そ日たなり。故ゆにイウデヤ人じん愈いされし者ものに謂いえり、安す息た日いなり、爾なんぢ牀とこを取とるは宜よろしからず。彼かれ答こたえて曰いえり、我われを愈いしし者ものは、我われに爾なんぢの牀とこを取りとりて行いけと言いえり。彼等かれら問なんぢえり、爾とこに、牀とこを取りとりて行いけと言いし人ひとは誰たれぞ。愈いされし者ものは其その誰たれたるを知らしざりき、蓋けだし彼處かしこには人ひとの衆おきに因よりて、イイスス隠かくれたり。厥その後のちイイスス此この人ひとに殿でんに遇あひて、之これに謂いえり、視みよ、爾なんぢは愈いえたり、復また罪つみを犯おす勿なかれ、恐おそくは患うれいに遭あうことさら更はに甚はなはだだしからん。彼かれ往ゆきて、イウデヤ人じんに、我われを愈いしし者ものはイイススなりと告つげたり。

(比較用 口語訳) ユダヤ人の祭があったので、イエスはエルサレムに上られた。エルサレムにある羊の門のそばに、ヘブル語でベテスダと呼ばれる池があった。そこには五つの廊があった。その廊の中には、病人、盲人、足なえ、やせ衰えた者などが、大ぜいからだを横たえていた。〔彼らは水の動くのを待っていたのである。それは、時々、主の御使がこの池に降りてきて水を動かすことがあるが、水が動いた時まっ先にはいる者は、どんな病気にかかっているか、いやされたからである。〕さて、そこに三十八年のあいだ、病気に悩んでいる人があった。イエスはその人が横になっているのを見、また長い間わずらっていたのを知って、その人に「なおりたいのか」と言われた。この病人はイエスに答えた、「主よ、水が動く時に、わたしを池の中に入れてくれる人がいません。わたしがはいりかけると、ほかの人が先に降りて行くのです」。イエスは彼に言われた、「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」。すると、この人はすぐにいやされ、床をとりあげて歩いて行った。その日は安息日であった。そこでユダヤ人たちは、そのいやされた人に言った、「きょうは安息日だ。床を取りあげるのは、よろしくない」。彼は答えた、「わたしをなおして下さったかたが、床を取りあげて歩けと、わたしに言われました」。彼らは尋ねた、「取りあげて歩けと言った人は、だれか」。しかし、このいやされた人は、それがだれであるか知らなかった。群衆がその場にいたので、イエスはそっと出て行かれたからである。そののち、イエスは宮でその人に会ったので、彼に言われた、「ごらん、あなたはよくなった。もう罪を犯してはいけない。何かもっと悪いことが、あなたの身に起るかも知れないから」。彼は出て行って、自分をいやしたのはイエスであったと、ユダヤ人たちに告げた。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは
 主 光 榮 爾 歸 光 榮
 はんぢにきす。
 爾 歸

※聖体礼儀③ へ